

読解・表現・思考の円環構造に基づく教科横断的な学習の実践 —石井睦美「銀色の裏地」を中心に—

勝倉明以（名古屋市立東丘小学校）

本発表の目的は、教科横断的な学習を行うことによって、どのようにスケールメリットを生み出すことができるのかについて実践的に検討することである。具体的には、国語科の学習で行う物語の読解と、図画工作科の作品製作における表現、「特別の教科 道徳」（以下、道徳とする）の生き方を考える思考という3観点を合科的に結び付けたカリキュラムデザインを行い、実践した。本実践では、学習内容を相互に関連付けることによって、円環構造が構築され、相乗効果が生み出される教科横断的な学習を目指した。発表では、実践結果の分析によって明らかになった効果と課題を示す。

本実践は、小学校5年生の児童を対象とした。国語教育教材である石井睦美「銀色の裏地」（光村図書、2024）と、図画工作教育教材である「心のもよう」（日本文教出版、2024）の内容を合科的に学習できるようにした。更に、両教科の学習内容と関連付け、道徳教育教材である「なんだろう なんだろう 生きる「しあわせ」って、なんだろう」（光村図書、2024）を対象とした関連カリキュラムを編成した。

現行の学習指導要領では、「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」等を通して「組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」、つまり、教科横断的な学習の導入とカリキュラム・マネジメントの充実が推奨されている。しかしながら、道徳科は今回の改訂で初めて教科化されたため、教科横断的な学習の実践例が少ないと言わざるをえない。とはいえ、学習指導要領の改訂によって重要視されるようになった「考え、議論する」道徳を実現するためには、国語科の学習を活かした道徳科の学習の充実が必要である。なぜなら、学習指導要領では「国語科では言葉に関わる基本的な能力が培われるが、道徳科は、このような能力を基本に、（中略）協同的に議論したりする」と記載されているからである。つまり、道徳科では、国語科の学習で身に付ける言語能力を活かすことが求められている。そのため、教科横断的な学習が教育現場で積極的に導入されることを目指し、子ども達が多面的・多角的に考え、議論することで、自身の道徳的諸価値を問い、形成することができる実践を目指した。

石井睦美「銀色の裏地」は、教科書改訂によって2024年4月から掲載された作品である。主人公の理緒は、クラス替えで仲の良かった友達と離れてしまい、寂しさを感じる。そんな中、新しいクラスで隣の席になった高橋さんと交流することによって、前向きになっていくという物語である。

本作は大きく分けて3つの場面に分けることができる。また、場面ごとに理緒が交流する登場人物は異なる。「銀色の裏地」は初掲載の書き下ろし作品であることから、先行研究が殆ど見当たらないといってよい。そのため、まず始めに場面ごとの理緒の心情の変化と登場人物の人物像に焦点を当てつつ、作品分析を行う必要がある。

最初の場面では、クラス替えの直後の様子が取り上げられ、4年生の頃は同じクラスの仲よしグループだったあかねと希恵とのやり取りが描かれる。クラス替えという物理的な距離はあろうとも、はじめは心理的な距離は感じていなかった。しかし、あかねの「でも」という一言で自分の思いを

理解してもらえないやせなさを感じるようになり、その思いがそのまま心理的な距離となる。次の場面では、高橋さんとの出会いが描かれる。心の拠り所だった友人と離れ、隣の席に座っている優等生らしい高橋さんに対して、理緒は近寄りたさや冷たさを感じる。しかしながら、理緒の想像とは対照的に、高橋さんは気さくで面白く、前向きに物事を捉えようとする人物だったと分かる。最後の場面では、高橋さんに思い掛けなく誘われた理緒と一緒にプレーパークに行く。ためらいを感じ、心を曇らせている理緒とは裏腹に、高橋さんは「銀色の裏地」という言葉を吐き、説明する。高橋さんの思いに2度にわたって触れた理緒は、考え方を変え、前を向けるようになる。

「銀色の裏地」の特徴は、理緒と読み手の心情が交差する部分にある。本教材の学習時期は4月中旬に設定されており、子ども達がクラス替えの結果への不満や寂しさに対して共感できる構造になっている。とはいえ、「高橋さん」が現実の子ども達の前に現れるとは限らない。しかし、物語の読解を通して彼女と出会うことはできる。換言すれば、本教材は登場人物の心情をテキストに沿って読み解いた学習を活かすことによって、自分の経験を振り返り、寂しさや不安との向き合い方を考えるための装置として機能させることが可能である。無論、国語教育において、高学年の物語教材を「道徳的」に読み解く——本作の主題を「前向きに生きることの大切さ」として収斂させて読解することは問題がある。そうすることによって、表層的な読解に留まってしまうことが危惧され、作品を精査・解釈できなくなる可能性が否めないからである。とはいえ、教科書に記載されている学習内容を参考にすると、読解が終わった後のまとめとして「自分の経験と重ねて感じたこと」をまとめる活動が設定されていることは見逃せない。そのため、読解を行った後に、自身の経験や思いと重ねて考えを広げることは問題ないと判断する。

この教材を道徳科と教科横断的な学習の教材として関連付けたのは、「生きる「しあわせ」ってなんだろう」の本文で書かれている「しあわせは、自分の考え方しだいでいつでもつくることができるんじゃないかしら。」という主題と、理緒を前向きにさせた高橋さんの言葉に共通性が見出されたからである。また、対象児童の実態として「書く力」が身につけておらず、自分の思いを言語化できないという実態があった。そのため、自分の思いを非言語的に表現する図画工作科「心のもよう」と関連付け、理緒の心情や自分の感情を自分で制作したカードで表現した。言語的/非言語的という両側面から捉え、議論させることによって、より深く自分の思いと向き合うことが出来るようになるのではないかと考えた。

その結果、まとめとして行った道徳科の「生きる「しあわせ」ってなんだろう」という問いに対して、一人ひとりが自分なりの答えを探し、考えを形成することが出来た。学習前のアンケートでは、「「しあわせ」になるために、できることはあると思いますか」という質問に対して、「分からない」を選んでいて児童が学習後は「少しある」を選ぶ姿も見られた。このような結果からは、学習全体を通して物語の読解と自身の思いを反復して言語的かつ非言語的に表現する活動を通して、多面的・多角的に問い続けたことによって、子ども達の考えが変わったことが要因として挙げられる。以上のことから、3教科を対象とした合科的な相関カリキュラムを編成の下で行った教科横断的な学習によって、児童の思考における転移可能性を高め、スケールメリットを生み出すことができたといえる。